

氏名	日野原 慶		
学位(専攻分野)	博士(文学)		
学位記番号	博英甲 第12号		
学位授与の日付	2015年3月25日		
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当		
学位論文題目	From Nature to Ecology without Nature: Environmental Imagination in the works of Peter Matthiessen, Edward Abbey and Don DeLillo 「自然」から「自然なき環境」へ： ピーター・マシーセン、エドワード・アビー、 ドン・デリーロの作品における環境的想像力		
論文審査委員	主査教授	折島正司	
	副査教授	外岡尚美	
	副査教授	西本あづさ	
	副査	明治大学准教授	
		波戸岡景太	

論文内容の要旨

日野原 慶

本論文は、文学と環境との関係に焦点を当てる批評的探究として1990年代初頭から現在に至るまで目覚ましい発展を遂げてきたエコクリティシズムの成果を踏まえて、Peter Matthiessen(1927-2014)、Edward Abbey(1927-89)、Don DeLillo(1936-)らの作品が提示する環境観について研究するものである。これら三人の作家が共有するのは、自然環境および都市環境が直面する危機的状況に対する鋭敏な意識である。特に1970年代以降に出版された彼らの作品が、環境に関わる諸問題を主題化するなかで、いかにして作者たちの危機意識を反映していたのかを明らかにすることが、本論文の第一の目的である。加えて本論文は、環境危機の捉え方、そして

環境自体の捉え方に関して、分析の対象とする各作品の間には決定的な差異が存在するのだという点についても指摘する。この点を明確にするために、本論文は、エコクリティシズムの大家Lawrence Buellの研究、そして同分野の近年における発展にもっとも重要な貢献をしている批評家のひとりであるTimothy Mortonの研究を議論の枠組みとして参照する。ビュエルは*The Future of Environmental Criticism* (2005)において、エコクリティシズムの通時的な変容を、自然中心主義的な主張に特徴づけられる「第一波 (the first wave)」、社会的な環境正義に基づく主張に特徴づけられる「第二波 (the second wave)」の二段階に分類し、来るべき「第三波」が「自然」と「環境」との自動化された連想関係を見直し、後者の概念の再定義と拡充に取り組んでいくであろうということを見出した。それに応えるかのように、モートンは*Ecology without Nature* (2007) に始まる一連の著作において、「自然」を中心化する環境思想の限界について考察し、「自然なき」エコクリティシズムの可能性を模索している。本論文が分析する作品群は、エコクリティシズムの変容のこれら二つの段階のそれぞれに呼応する文学テキストである。マシーセンとアビーの作品を「自然」中心型の環境主義を体現したテキストとして、デリーロの作品を「自然なき」環境主義を体現したテキストとして分析し比較することで、文学を通して提示されるこれら二種類の環境主義のパラダイムの差異を明確にする。それにより、いかにしてこれらのテキスト内に前者の限界そして後者の可能性と見做され得る特徴が刻み込まれているのかを考察することが本論文のより主要な目的である。

本論文は四つの章と序論、結論から構成されている。前半の二つの章では、自然中心型の環境主義を体現した文学テキストの例として、主にマシーセンとアビーの作品を分析する。つづく後半の二つの章では、「自然なき環境主義」を体現した文学テキストの例として、主にデリーロの作品を分析する。マシーセンとアビーの作品の根底にあるのは、自然と文明との二元論を前提とする環境意識である。環境危機は、自然と文明との間の融和不可能な対立という枠組みを通して認識され、その元凶と見做されるのは後者による前者の侵犯である。この環境主義的二項対立においては、必然的に、保護されるべき環境が自然と同一視される。加えて、この環境=自然は、文明の影響下に存在する人間主体からは独立し隔絶した対象として措定される。モートンを含む近年のエコクリティシズムの批評家たちが乗り越えることを模索し、彼自身の研究が「こちら側 (over here)」と「あちら側 (over there)」との分断として批判的に論じているこの二項対立は、デリーロの作品においては徹底的に無化さ

れている。都市環境を舞台として汚染と廃棄物を主題とする彼の小説は、自然を理想化する環境主義のいわばアブジェクトであり続けてきたそれらの存在を、現代社会における環境の排除不可能な構成要素として再定位している。したがって、彼のテキストが体现する環境的想像力は、文明の影響下に存在する人間主体と環境との間にはいかなる分断もないのだという状況を認識することを可能にするものであると考えられる。言い換えれば、それは、主体が常に環境／環境危機の内部に存在し、汚染された身体を備えた主体の内部に環境／環境危機が常に存在するのだという現実を明確に認識することを可能にする想像力なのである。

序論では、環境問題を集めたTIME誌の1989年第一号の記事とKaren Tei Yamashita (1951-) の小説*Through the Arc of the Rain Forest* (1990) とを比較し、科学的な環境言説による可視化および数値化の作業が可能にするもの以上に創造的で、それゆえにある意味ではより正確な環境危機の様態の表象が、文学作品および文学批評を通してなされ得るのだということを主張する。続いて、ビュエルによる議論を参照し、エコクリティシズムの「第一波」と「第二波」の特徴を明示する。加えて、それに続く「第三波」の代表例として、モートンを始めとする直近の批評家たちによる研究を紹介しつつ、本論文自体の立場も「第三波」と緊密に同調するものであることを表明する。

第一章では、自然環境に焦点を当てた文学的な語りが、いかにしてその対象を表象し得るのかという点を巡ってなされたエコクリティシズムにおける論争を紹介し、言語による自然表象の限界こそが環境を主題とする文学作品の可能性の地平でもあるのだということを、ビュエルによる「環境的無意識 (environmental unconscious)」という概念を手掛かりにして論ずる。そして、文学作品における自然中心主義的な語りや環境危機への抵抗の一手段として認識されるようになった1970年代の文化的背景を踏まえつつ、マシーセンのネイチャーライティング作品*Snow Leopard* (1978) が、言語による自然表象の限界について自覚的であるという点を指摘する。最後に、このテキストが、そのような限界を前提にしつつ、なおも言語を通して自然を描こうとするなかで、逆説的に、主体としての人間と客体としての自然との二元論を強化してしまうのだという点について論ずる。

第二章では、環境保護運動の一変種としての環境テロリズムが、アビーの小説*Monkey Wrench Gang* (1975) において、人間と圧倒的な力を持つ敵対者との格闘を物語の中心に据える西洋の悲劇的文学の伝統に接続される形で、小説の主題とな

り得ているのだということを論ずる。加えて、環境テロリズムを含む広義の環境正義の運動が、人種や貧困などに関わるその他の政治的・社会的正義の運動とは不可分であるという実情が、この作品において描き出されているという点について論ずる。しかし同時に、この作品に描かれる環境的抵抗が、文明の外部に存在する「手つかずの自然」を理想化し、その自然を根拠とすることによって成立する、Leo Marxが言うところの「パストラル」な欲望に基づいたものであるという点を指摘し、マシーセンの作品同様に、本小説が提示する環境観も自然と文明との二元論を強化してしまうのだと論ずる。

第三章では、アメリカにおいては伝統的に、環境危機の認識およびそれに対する警告が、黙示録的な想像力と修辞を通してなされてきたという文化的背景を踏まえつつ、環境「汚染」を主題化した文学作品においては、それらとは異なる、新たな環境危機の認識の枠組みが中心的な役割を果たしているということをデリー口の小説*White Noise* (1985) の分析を通して論ずる。具体的には、それは、危機的状況の不可視性と遍在性を前提とする認識のあり方であるが、ドイツの社会学者Ulrich Beckがこの小説の出版と同時期に論じた「リスク認識」との類似性が非常に高いということも指摘し、これらのテキストが地球的な規模で進行する環境汚染に対する応答として必然的に生み出されたものであるという主張を行う。最後に、汚染された環境を主題化することによって、この小説が自然中心型の文学的環境言説によっては捉えられない代替的な環境観を提示しているのだということを主張する。

第四章では、廃棄物処理能力の限界が深刻な問題となっていた1980年代終盤のアメリカ国内における社会的状況を踏まえつつ、デリー口の小説*Underworld* (1997) が、「ゴミ」を構成的外部としつつ、その「ゴミ」に脅かされ続ける都市環境の様態を批判的に描き出していることを指摘する。加えて、「ゴミ」を主題化することにより代替的な環境の表象を提示する企図であるところのこの小説が、文学批評を通して「自然なき環境主義」を追及する近年のエコクリティシズムの議論といかに共振し、いかにそれらを触発し得るのかという点について論ずる。最後に、文学あるいは芸術の力を通して廃棄物の救済がなされ得るのだと論ずる批評的傾向に抗して、安易な廃棄物の救済の思想こそが、廃棄物という存在の不可視化と忘却を助長しうるのだという可能性が、この小説に描かれているのだという考察を行う。

以上のように、本論文は、近年のエコクリティシズムにおいて議論されてきている、自然中心的な環境主義の限界、また「自然なき」環境主義の可能性がいかなるもの

なのかという点について、実際の文学テキストを通して考察している。そして、後者のパラダイムにおいて、前者のいわばアブジェクトであり続けてきた存在が議論可能な対象になることで、いかなる環境的思考が生み出され得るのかを考察している。

審査の結果の要旨

日野原慶氏の博士学位申請論文、「《自然》から《自然なき環境》へ——ピーター・マシーセン、エドワード・アビー、ドン・デリーロの作品における環境的想像力」は、第一に、アメリカにおける環境批評の成立と発展を概括・整理し、第二に、この経過の中に環境概念自体の大きな変化と新しい環境概念の成立を確認し、そして第三に、この新しい環境概念に照らして自らの環境批評を実践し、重要な環境文学作品に、定説を覆す新解釈を加えることを試みている。

“Introduction”では、Lawrence Buell, *The Future of Environmental Criticism* (2005) に依拠しつつ、環境文学と環境批評を、自然中心主義の第一波、環境に対する人間社会の振舞いにもっぱら関心を注ぐ第二波、自然と人間社会の相互浸透・相互依存を関心の焦点とし、この相互浸透の状態こそが環境であるとする第三の潮流、と時間的に整理する。そしてこれら三潮流を現在では重なりあって存在している環境批評の三つの類型であると述べる。同時に、日野原氏自らはTimothy Morton, *Ecology without Nature* (2007) を最も鮮明な代表とする第三の潮流に掉さず者であることを明確にしつつ、この潮流に属する最新の環境批評家の研究を概観している。ここで日野原氏は、生成発展中の新しい批評方法について、十分な情報提供と整理を行いながら、明快な見取り図を提供することに成功している。

第一章は、自然中心主義的な環境文学と環境批評を扱う。本章はまず、環境を自然と同一視し、人間の諸活動から断絶したものと捉えつつ、文学研究がこの環境に生じた危機に対してどのような積極的介入を行うことができるかを問う第一波の環境批評を概観する。そののち、美しい自然としての環境を文学に取りこもうとする作家として、ネイチャー・ライティングの祖とされるHenry David Thoreauと、20世紀の特異なネイチャー・ライターの一人Peter Matthiessenを取りあげる。彼らに共通するのは、物理的実在である自然を真正に表現する言語を見出そうとする欲求であるが、言語にぴたりと重ね合わすことのできない実在として措定された環境（自

然)に、それでも言語をびたりと重ね合わそうとするこれら作家の行為は、結果として無垢の自然を理想化し、意識から見た自然の根源的接近不可能性を強化している、と論ずる。氏の議論は、「崇高」の概念やロレンス・ビュエルの唱える「環境的無意識」についての考察を巧みに取り入れ、説得力豊かに展開されている。

第二章は、環境に対する人間社会の振舞い、特に環境不正義 (environmental injustice) に関心をそそぐ環境批評の第二類型を素描したのち、環境保護主義の社会的背景の中、環境不正義を働く文明社会への抗議を行う作家として、アメリカのネイチャー・ライティングを代表するEdward Abbeyを取りあげる。とりわけ小説 *Monkey Wrench Gang* (1975) は、環境破壊的開発に対する破壊活動 (エコタージュ) を行う英雄 (エコヒーロー) を登場させ、現実社会における急進的環境保護運動の教科書となった。この小説には、ベトナム戦争、アメリカ先住民への収奪など、自由の名において国家が行使する暴力に対する怒りと抗議が露わであるが、抵抗の根源的な根拠と動力は、文明を捨てた無垢の自然に回帰する衝動である、と日野原氏は論ずる。自然を理想化する型の環境文学に対する批判的な視座に立ちつつ、そうした文学が有効な社会的批判機能を持ちうることに理解と共感を示す複層的な視点を維持しえているところに、氏の議論の成熟度を見ることができる。

第三章と第四章は、自然と人間社会の相互浸透・相互依存に関心の焦点とする環境文学と環境批評の第三の潮流を論じ、Don DeLilloの二つの長編小説を解釈する。

第三章では以下のような議論が行われる。第二類型の環境文学は、地球環境全体が危機の直前にあり、この危機を回避するために社会的・政治的改革が必要であるとして環境主義的な対抗モデルを示す。それはまた環境論的終末論の物語で、危機はいまだ回避可能であるとされる。だが環境危機をこのように終末論的に捉える見解は、近年の環境批評ではしばしば問題視される。Fredrick Buell, *From Apocalypse to Way of Life* (2004) は、すでに危機は到来し日常生活と人々の身体に浸透しているという認識を提唱し、Rob Nixon, *Slow Violence and the Environmentalism of the Poor* (2011) は、はじめも終わりも判然とせず、即座に感知できるわけでもない危機、“slow disaster” に注目しつつ、身体内で生じる危機をそのようなもののひとつとして取りあげている。デリーロの *White Noise* (1985) は、「緩慢な環境危機」の中に住む人々という主題を扱う小説であり、そこでは日常生活を営む登場人物の身体の中に毒性が浸透しつくしている。ここには、不可避、不可視、緩慢、内在的かつ継続的な危機を特徴とする新しい環境の概念が示されている。

本章の議論においては、環境批評史の理解と整理が、環境文学の実作解釈と見事に結びついている。

第四章は、デリーロの*Underworld* (1997) が提示する文明とゴミの関係についての特異な理論を検討対象として、環境文学と環境批評におけるこの新しい環境概念をさらに検証する。不要になった兵器などの廃棄物を再生、再利用、再循環して社会の再生につなげる可能性が描かれていると多くの先行研究がみなすこの小説は、じつは外部に排出されなければならないおぞましきもの (the abject) としての再循環不能ゴミに焦点を当て、そうしたゴミをも包含する環境概念の可能性を提示している、というのがその検証の結論である。環境文学における第三の新しい潮流では、自然を脅かすものを含み込んだ全体を環境と考える。この環境概念では、文明社会がその外部に排出、隠ぺい、忘却している種類の再循環不能なゴミこそが、「構成的外部」として環境を構成しているとされるのである。スラヴォイ・ジジエク等の最新の議論を参照しつつ展開される本章の議論は、第三章と同様に批評史の把握と実作の解釈が過不足なく融合した高い説得力を有している。

本研究は、1990年代以降急速に展開してきている環境批評の歴史的概観として、わが国には例の少ないものである。また、環境批評の成果を広範かつ綿密に検討したうえで、現在発展し、変化しつつある環境批評の背後には、環境についての大きく異なった考えが併存しているという、注目すべき見解に到達している。さらに、この見解に基づき、廃棄物を含み込んだものとして再定義された環境概念を用い、重要な環境文学作品に従来の説を覆す斬新な解釈を与えている。テキスト解釈の細部、また各種理論的枠組み導入の慎重さにおいて、より一層の洗練が望まれる点もあるが、論文全体を通じて流れる文学の社会的機能への希望と熱意には、それを補って本研究のさらなる発展を確信させるものがある。2014年12月17日に開かれた公開審査において、日野原氏は研究者たるにふさわしい真摯な研究姿勢と十分な学識を有していることが確認された。

以上の理由により、審査委員一同は、本論文が博士の学位を授与されるに値するものと判断する。